Chapter 2

1　生誕の日

怜悧な艶で、毛穴のない大理石のような肌をした若い男だった。冷ややかな表情の顔は端正でギリシア古典期のカノン κανων(規範)が現象したかのようだ。

白い絹を緋色の文様で染め、金糸の刺繍を施したローブを引きずり、純金の首飾りや腕輪をしている。手に持つステッキは純金と象牙と黒檀でできていてとても細いが一面に陀羅尼（真言）が彫られ握り部分に山羊と蛇の彫刻があった。

「私（わたくし）はイヴィルと申します。帝国の枢機卿（すうきけい）です」

肩に被る明るい金のストレートヘアは荘厳、不敵な薄笑いを泛かべ、言葉は丁寧だが、眼は人を蔑み、眼差しがイユノを睥睨している。唇が薄くて酷薄に見え、妖しい威圧感が全身から靄のように漂っていた。

高雅を装い、勿体ぶってかくも言う、その雰囲気だけで十分に尋常ではない。しかしイユノは意にも留めずに、

「はぁ？　すーきけい？」

そう言い放った。イヴィルと称する男は微かにゆっくり眉を上げた。

「そうですか。

まったく動揺しないのですね。想定以上に眼覚めが進んでいるということですか。いや、結構です。とてもよろしい。

枢機卿とは高位の聖職者を言います。と言っても何のことはわかりますまい。いま一度に説明するは酷というものでしょう。いずれ時至ればゆるりと・・・さような機会が今後あればですが」

ふん、鼻先でイユノが笑う。

「別に。事情はそのうちわかるだろーから気にしないよ。ついでに

言っとくけど、枢機卿ぐらい知ってっから。
まあ、そんなことより、ふーん、やっぱりそーなんだ」
「やっぱりとな？　どういうことですか」
「決まってンじゃん。
わたし、封印されていたんだ」
「ふむ。気がつきましたか」
「でも誰がわたしの力を封印してたの？　何のために？」
イヴィルは再び眉を上げた。今度は自制なく、つまりわざとらしい驚きの表情を作った。
「誰がですって？　おお、何と！」
「そうよ。何なの？　わたしの疑問、おかしい？」
「誰かがやったなどと考えているから驚いたのです」
「そうよ、だって誰かやった奴がいるんでしょ？」
「馬鹿な。あなたが自分自身でやったに決まっているでしょう」
「ふざけないでよ、何でわたしがそんなことするの。そんな記憶もないし、ていうか、できるわけないじゃん」
イヴィルが笑う。
「愚かなことを言う。考えてもみなさい。アスラの力を封印できる者がこの宇宙のどこにいるかを。
アスラ以外にはいないのです」
「…そういうことになるんだ。じゃ、わたしがただ記憶してないってことなの？」
「当然です。記憶もあなたご自身で消されたのです」
「ずいぶん念が入ってるのね。でもそれじゃ、永遠に解けないかもしれないじゃん」
「ちゃんと眼覚めの時が来るように設定していたに決まっているでしょう」
「ちっ、そうか。
全部予定どおりだったんだ。ふん。もしかしたら娑斗獅とのことも。シノブのことも」

「さあ。そこまでは私も関知いたしません。
さあさあ、眼覚めたのであれば早々に手続きを済ませよう」
「手続き？」
「一定の手続きが必要なのです。仕上げをするのです」
「へー。
で、何であんたがそれを手伝うのよ。全体がよくわかんないわ。
信用できないね」
「ごもっとも。
わかりました。簡単にご説明いたしましょう。
私は契約した内容を履行しているに過ぎないのです。私はあなたから依頼されて実行しているだけに過ぎないのです」
「契約？
わたしがあんたを信用していたってこと？　こんなに胡散臭い男を、このわたしが！
ま、すべての現象は約束によって成立しているからねー。〝〇〇ごっこ〟みたいなものなのよ。
じゃ、契約書見せてくれる？」
「約定の内容は言語ではないのです。
人間は言語と考概と思惟とを使いますが、すべての存在者がみんな同じではないことをご了解ください」
「じゃ信じないね」
「そう言うと思いました。
いいでしょう。これ」
イヴィルが差し出したのは片手に余る石だった。楕円形で摩滅し滑らかな表面で漆黒だった。金が星のように小さく鏤められている。しかし人工ではなく、自然のようであった。
「わかりますか」
「わかんねーよ」
「そうでしょう。これは賢者の石の一種です。
もっともあなたが契約時にそう決めたというだけのことですが。

しかしあなたにはその権利があるのです。
しかしいまではわからないとおしゃるか」
「意味わかんないし。莫迦にしてる？
まあ、どうでもいいわ。ともかく信用しないからね」
「この件に関しては私の落度ではありません。あなたの瑕疵ですよ、イユノ・アスラ。
私は結果的に契約を履行しないことになりますが、この場合は契約違反ではありません」
イヴィルは背を向け、イユノは考えた。
「ちょっと待て。少し時間をちょうだいよ」
「履行期限は今日までです。
今日できないのなら、私は契約不履行です。待つ意味がまったくありません」
「わかった。やれよ」
「信じるのですね？」
「いや。
しかしわたしはアスラだ。おまえごときが何かを企んでも大した問題じゃない」
「ありがたいお言葉ですな。
では、さっそく仕事をすませましょう」
「さっさとやってよ」
「それではパソコンを立ち上げてください」
「パソコン使うの？　まじ？」
「さっさとやれと言ったのはあなたですよ。いたずらな無駄口は慎み、為すべきことを速やかにお願いします」
「わーったよ。
何かすげーインチキ臭いんだけど……もっと秘法というか密儀みたいなの期待してたんだけどなー」
「同じですね。
パソコンだって自然の一部です。人間が自然の一部だからです。

椰子が実を生すのを見て、それが自然の一部じゃないと言う人はいないでしょう。同じです。

人工などという言葉は不要な言葉なのです。広辞苑からは是非抜くことを推奨しますよ。

ＣＰＵも当然、自然の産物です。

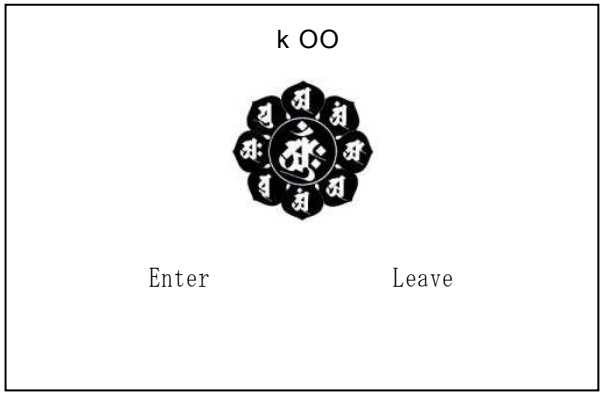
そもそも魔法は拡張した知性なのです。知覚の延長です。ＰＣはその延長線上にあります。パソコンじゃおかしいと言う方がおかしいのです」

「わかった、わかった。言い方がしつこいよ」

「このアドレスを入力してください。ブラウザは何でもいいのです」

ＰＣの電源を入れる。アクセスする。

「なんだ、これ？」



こんなサイトが立ち上がった。

「エンターすればいいんだよね？」

「むろんです」

次に出てきたメッセージ。

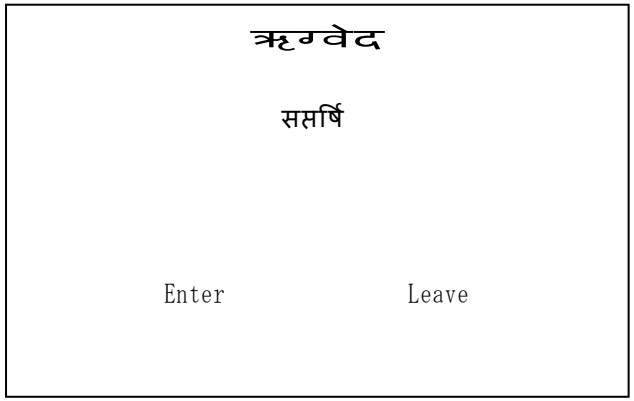
・・・Choose a favorite religion.・・・・

「好きな宗教を選べと書いてあります」

「へー」

その下にアルファベットがならんでいた。イユノは勝手にＡをク

リックする。
「そこではありません」
しかし無視。
英語の名詞がずらりと出て来た。
『Antigua and Barbuda』、『Arab Republic of Egypt』、『Argentine Republic』……
「国の名称です。国から宗教を選ぶのです。あなたはインドを選んでください」
「なるほど」
Ｉをクリックする。
そして『India』をクリックする。
出て来たのは、



イユノはまったく読めなかった。
「エンターしてください」
「わーってるよ。
ねー、これ日本語になんないの？」
イヴィルは無言で指さす。
画面の右上に Language という文字が見えた。
「これクリックすればいいのね？」
すると現れた。English, German, French, Spanish, Portuguese,

Chinese, Korean, Russian, Assamese, Hindi, Thai, Vietnamese, Persian, Swahili, Japanese・・・

「あ、これだ。さすがにこれはわかるね。早く教えといてよ」

ジャパニーズをクリックした。

「では次。『神名』をクリックしてください」

「へーい」

そして画面には、

・・アグニ、ウシャス、プーシャン、サヴィトリ、パルジャニア、スーリヤ、ヴィシュヌ、インドラ、アスラ、ミトラ、ヴァルナ、アシュヴィン双神、ヴァーユ、ラートリー、リブ三神、ルドラ、マルト神群、アラニアーニー、ナディー、アディティ・・・

「ふーん。古代ヴェーダ神話の神だ」

「そういうことはよく知っていますね。そのとおりです。

さあ、もうわかるでしょう。

『アスラ』をクリックしてください」

するとディスプレイが燃えるように黄金に輝き始める。

潮のように画面からあふれ、部屋が光で満ちあふれた。視界のすべてが光の眩さによって簒奪された。

火炎に象られた小さな真円がいくつも現れ、その一つ一つの中に揺れる黄金の文字が浮かんでいる。

「その文字をなぞってもらいましょう。

この文字は梵字です。聖なる文字、サンスクリト文字とも言います。全体は曼荼羅を做しています。梵字で作った曼荼羅です。

さあ」

イユノは指を挙げてなぞる。指先が蛍のように光る。ちょっと高さが中途半端で書きにくいので、指でドラッグしてもう少し高い空中に置く。

「ふ。

理解していますね。

ではアスラにアクセプトを申請してください」

イユノはイヴィルの言葉を無視した。
「凄い。きれいだね、この梵字」
しばらく眺める。そしてドラッグして自分の額に飾る。炎叢の熱を額に感じた。
「……」
イヴィルは黙って何も言わない。
静かな炎だ、心を癒す、ロウソクのように。イユノはそう思った。
周囲が神聖な静寂に包まれる。イユノは次々と梵字を自分に貼る。頭頂に眉間に頬に顎に喉に鎖骨に肩に胸に鳩尾に臍に陰部に会陰に腿の付け根に腿に膝に脛に踝に足の甲に足指に二の腕に肘に手首に掌に指に首筋に肩甲骨に背に臀部に…
自らを曼荼羅にする。第三の眼が開く。
イヴィルが静かに言った。
「では、[illegible]（七聖賢（サプタリシ）、七神仙）、叡智を授けよ、と唱えるのです」
イユノの口からほとんど無意識的に、自然に言葉が出た。
静寂が破れ、尾骶骨のあたりから背骨を噴き上がるように体が熱くなる。
「あ、熱い……」
全身が黄金の太陽のような炎になる。
炎の強さはどんどん強烈になり、光の燦めきに変わる。
イヴィルが言った。
「さて、次は出かけましょう」
「出かける？」
「そうです。仕上げにすべきことがもう一つあります」
「わかったけど、どこへ」
「龍背鬣峯（りゅうぜりょうほう）です」
「龍背鬣峯？」
それは眞神の奥にある眞神山系の一つだ。風雨の浸食によって石や岩が磨かれ、怪石をなし、黄山に似た断崖絶壁の奇観をなしている。安房湾から流れ込む湿った空気が大量の霧や雲を発生させて漂

い、岩の割れ目に奇松が根を張っている。

「パソコンで手続きした後は山奥で儀式でもするわけ？　何か脈絡なさ過ぎじゃん？

ま、いいけどさ。で、どうやって行くのよ」

「むろん、お車を用意させていただいております」

窓を開けると、黄金に輝く龍が牽く車が中空に浮いていた。

「お車は純金と黒漆と螺鈿とダイヤで作ったロールスロイス・ファントム Rolls-Royce New Phantom Landaulette De Ville 1927 です。運転席には屋根がなく後部の座席が広くて立派な屋根がついているクラシック・カーだった。

「では手をお貸しください」

軽やかに空中を歩くようにまたぎ、イヴィルが開けた扉からイユノは座席に坐った。

ハンドルを握った枢機卿が言う、

「出発します」

思考よりも速く飛び、たちまちに着く。「さあ、あそこに降りましょう」

龍背鬣峯は鋒のような奇怪な岩が連なり、龍の背の鬣のようであるところからその名で呼ばれる。扉を開けるイヴィルに手を引かれて中空を歩き、イユノは足場の狭い尖った岩の上に降り立った。

「見てください。

この奇観を。尋常ではないエネルギーがこの異様な威容を象らせたのです。

これが龍脈というものです」

「なるほどねー」

「さあ、この岩に触れてください、手で。

この膨大な巨魁なエネルギーを受けてください。数億年も前からこの峯はこの時を待っていたのです。小さな人間がこんなにも大きなエネルギーを受け留めたらたちまち死んでしまうでしょう。いや筋肉の繊維の滓さえ、砕け散って骨の粉さえも残らないでしょう。

しかし、あなたにはそれを受け入れるだけの器ができ上がっています。

この絶大なエネルギーを利用して扉の鍵を捻るのです。そうすれば無限大のあなたの力が少しずつ解放され始めるのです」

イユノは見渡した。

独虎白龍岳や火之鳥岩が最初に目に入る。火々禽の柵の戦いで火の鳥が降りて鳴撃したという岩だ。黒々とうねる眞神川も見える。遠くに村、遙か遠くに街や黒い海が見えた。

霧が松に這い、雲が峯にまとわりつき、月光が皓々と照る。イユノは神秘的な光景に目を奪われながらもうなずいた。

「わかったよ。

不思議だわ。それらしい気分になってきたね。真実って、そういうことなんだ。現実が真実」

手を当てた。

感じる。岩の奥底から、峯の奥底から荒々しく湧き起ってくる龍神のエネルギーを。「あゝ」 イユノは思わず歎息した。

「凄い。凄いよ」

臍下丹田から青白く輝く熱い熱い光の塊が燃え立ち上がる。

自転する地球の轟音が聞こえた。丹田の光が鳩尾(みぞおち)に達する。宇宙を公転する大轟音も聞こえた。光輝が胸に達し、黄金の潮となり、体を突き破り、天を、大地を照らす。大銀河系が互いに加速しながら離れて行く壮絶な大音響が宇宙を超え貫き破って氾濫した。熱い燦めきは終に脳髄に達し、宇宙を凌駕した。無際限にある並行宇宙を軽々超えて蹴散らす巨大で凄絶な勢い。

炎炙爛火焔熔燎炼燦烔烱光輝耀瞭晰晃亮啓亨融通無限自由奔放天衣無縫魁偉大強烈々烈々烈々烈々烈々烈々烈々烈々烈々裂裂裂炸裂

巨大な沈黙となる。

時間が存在しない。空間が存在しない。存在も非存在も越えてす

べてであった。
説明不能だ。
いままでイユノは時間がないという状況が実際にどういう状況なのか、空想することができなかった。空間がないという状態がどういう状態なのかも同様に、いままではまったく空想することができなかった。しかし。
いまはわかる。
ただ現実こそが存在する叡智であって、言葉や思惟などは装飾品に過ぎない。誰にも語れないし、どんな説明もありえない。ただ自ら味到するのみである。現実。
「たぶん、これが叡智という言葉の意味なのね。アスラになるってのは、こういうことなのね」
そして微笑む。
「だから万能なのよ、だから負けるわけがないんだわ」
高らかに笑う。哄笑する。
神学院で永年にわたって文法学・語源学・修辞学・読誦学・解釈学・法源学・法学・神学・伝承批判学を学び、修業を積んだ者であるかのように明確な自信が生まれる。
眞神の岩山が見えたと思った瞬間、イユノは自室にいる自分に気がつく。イヴィルは消えていた。

「じゃ、まず娑斗獅を殺してみるか」
最初に思ったのはそれだった。思いを遂げるのだ。想像するだけでも気持ちいいはず。
・・・でもなかった。
期待したほどの興奮も快感も怒らない。なぜ？
イユノは部屋の窓を開けた。夜の風が頬をなでる。彼が住んでいる眞神村の邸宅の方向をにらむ。行ける気がした。ためらいはない。
一歩踏み出す。落ちない。空中を歩ける。泳ぐように手足を軽く動

かす。進む。高く上がる。すなわち飛んでいた。
思ったとおりだ。
イユノは高く、より高く翔け上がった。
いくつかの雲を越えた。
雲と雲のあいだから遙か下方の世界が見える。笑う。笑い舞う。
世界を睥睨し、いままで望んでいたことなど、何とちっぽけでつまらないものだったことかと思った。
自由に空を翔け、悠々と楽しみ、娑斗獅の住む旧家の屋根に音もなく降りた。
まるで真夜中の黒いカラスのように。
二階の窓の中に彼の部屋が見える。
部屋の電灯は点いていたけど、ギターや楽譜や雑誌の散らばったベッドで彼は眠っていた。しみじみ眺める。
こんな男を殺すのは簡単過ぎる、そう思った。
「いつでもできるじゃん」
眠っている娑斗獅にあのカリスマっぽさをまったく感じなかった。しょせん、人間のカリスマ性なんて、光輝く神性に比べれば比較の対象ではない。
実はもうその気がない自分にイユノは気づいていた。結局、人間がムキになるのは余裕がないからなのだ。失いたくないと追い込まれるからからなのだ。
満たされればそもそも気にならない。
「くだらない。全部くだらないことなんだ。哲学も学問も。くだらない見栄だ、カモフラージュ、捏造なんだ。復讐根性、ルサンチマン ressentiment だ」
同時に再び笑いが込み上げる、ふ、わたしには関係ない。わたしは万能なんだ、何でもできるんだ、誰にも負けない。人はできないから欲するのであって、いとも簡単にできるなら興味を喪うものだ。
或る意味、死んでもいいくらいだ。
でもまだ完全に眼覚め切っていないことが何となく自分でもわ

かっていた。もし本当に眼覚め切っていたら躊躇いもなく死ぬのではないかと思えた。すべてが眼を開いたらどうなるのか。凄過ぎて想像もつかなかった。怖いぐらいだが、恐くはなかった。むしろ解放された、その気持ちが強い。

あははは。さあ、帰ろ・・・っと。

イユノは家に戻った。

そして安らかに深く眠った。

2　力

『薙久簔町神中洲で高校生の惨殺体　連続殺人』

二階から降りて来て朝の食卓に着いたイユノは何度も記事を読み返した。

「何でこんな田舎で!?

もしかして有史以来初めてじゃないの？」

すると冗談じゃないとばかりに矍鑠たる祖父平衛真弓劔衛門（まゆみつるぎえもん）が言う、

「莫迦を言うな。

大昔は殺人だらけじゃ。戦に明け暮れておったわい」

「いつの時代よ」

「うむ確かに火々禽の柵の戦い以来戦争はないがな」

「千五百年くらい前の話でしょ？　何言ってんのよ、おじいちゃん！」

イユノはそう反論したが、新聞から目を離さなかった。

一昨日の晩と昨晩とで四件もの殺人事件が神中洲で起こったらしい。しかも高校生ばかり。最初は生徒の精神的なショックへの配慮から発表されなかったようだが、事件が大きくなり過ぎてメディアに応えざる得なくなったらしい。

薙久簔なんて小さな街なのに、しかも神中洲って限定された場所で四件も・・・・

スマートフォンを取り出す。「やっぱり！」

ツイッターで凄く話題になっている。被害者は男の子ばっかりらしい。しかも噂ではみんなイケメンばかりだったとか・・・どこまで信憑性があるかわからないけど・・・

交互にスマートフォンと新聞とに見入っている彼女に、父親槍平（やりへい）定之丞杜清義孝（ていのすけもりきよよしたか）が珍しく話しかけてきた。

「おまえと同じくらいの子だぞ。学校名は出ていないが、この郡市にある高校はいくつもないから限定されるな。しかし。

深夜の中洲の路上で、って何してたんだか・・事件に遭ってもやむなしだな・・自己責任だ。高校生になれば分別があるだろうに。

ま、犯人が一番悪いのは当然だが」

上から目線でわざと含みを持たせる歯切れのわるい言い方。これ父のいつもの話し方だった。めんどうくさくって敬遠したくなる。この人、青春時代は絶対女にモテなかっただろうなとイユノは思うのであった。

「へー。怖いね」

無表情に応えておいた。なんちゃって、怖いわけないじゃん。宇宙最強の存在者の一人なんだもん、わたしは。などと想いつつ・・・

ちなみに父はイユノの変化に気がつかないようだった。わたし、自分が思うほど変わっていないのかな・・・・少し残念に思うのであった。

「おはよう、イユちゃん。パン焼けてるわよ」

母が言った。

イユノ、トーストを一瞥してから、

「いらないわ」

「どうしたの、今日は食欲ないの？」

「らしいね」

「ねえ、イユちゃん、体調はよくなったの？　お医者さんにも行かないで」

母が心配そうに声をかける。

「ああ。もうまったく平気よ。じゃ、行ってくるから、学校」

イユノは鞄をつかんで立つ。玄関を出ると曇天で三歩と歩かないうちに雨が降り出した。

自分って基本、雨女だ、って以前は思っていた。でも、たぶん違う。いまではそう思っている。なぜなら。

左腕を見た。手の甲、手首から肘だ。美しいグラデーションをなす青がうっすら泛かんでいる。踊る紐のようなかたち。青龍だ。龍は雨神……

それは昨晩から現われ始め、時間とともに刺青の図柄のようなものになって浮かび上がってきていた。

……ほんと、刺青みたい。しかも和彫りの。わたし、インドの阿修羅をインストールしたはずなんだけど……

「どうやら龍神の素質も備わっているらしいわ。

眞神群には龍に因んだ名前が多いけど、何か関係あるかもね。事情を知らないでこれ見た人はわたしが刺青したと勘違いするだろうな。

あはは、面白い！」

気にしなかった。そのうち右に朱雀でもあらわれるんじゃないかしら。玄武と白虎があれば四神相応（しじんそうおう）？　まあ、焦らないわ。楽しみに待つ。彼女は眼に見えないオーラを放ちながら軽々小走りのように歩む。気分は King Crimson『Lark's Tongues in Aspic』だ。

「空でも飛んでやろうか。

嵐でも呼ぶか？

地を裂くこともできるし、星を墜とすことだって可能だわ。

っははははは」

龍呑神社への参道でもある石畳のメインストリートを歩み、古街道のバス停に立つ。小さなバスが来た。坐る。乗客の何人かが自分を見ていることにイユノは気がつき、独り微笑する。龍呑駅前で降りる。

道ですれ違う人がときどき奇異な眼でイユノを見た。刺青が眼に

ついたのか、それとも彼女の異形の雰囲気を感じ取ったのか、わからないが、愉快であった。ふふ。そうよ、それが何？

駅でもすれ違う人が見つめる。特に男性が。振り返るし、とにかく好奇の眼と言うか、今までとはまったく違う感じだった。

電車に乗ったら茸柳（たける）がいた。同じ蒼龍高の同学年。内気でオタクで小太りでいつも背を丸めて元気なく丸眼鏡で小柄で陰気で大人しい男子。

「相変わらず元気ない奴だなー。どうせ遅くまでゲームでもしていたんだろーなー」などとイユノは腕を組んで見下すように勝手に決めつけてつぶやく。薙久簔駅で天海線に乗り換える。むろん茸柳も一緒だ。

赤門戸駅に着くと、蒼龍高校で同じ学年の天草ジローや佐貫アヤ、あの赤門アカネ、甕淋太良（いしだたみりんたろう）、蹈鞴（たたら）イタチ、そして転校生、飛鳥タロトがバス停にならんでいた。

バスに乗る。バスでも同じ高校の生徒たちの視線を感じる。正門前バス停で降車した。少し時間が遅いからみんなバスを降りてからはやや小走りだ。イユノは悠然と歩く……

門の傍で男女数人が立っていた。派手な不良たちだった。

「よー、誰かと思えばイユノじゃん」

「どうしたんだよ、病んでたんじゃないのか？」

「フラれちゃったんだよねー、かわいそー(笑)」

イユノは立ち止った。

ヤンキーらが顔色を変える。

「何だよ？　あ？　何か文句あんのかよ」

「別に。これ見て」

指差す。指差したアスファルトが鈍く重い破裂音を立てて爆ぜ、1メートルほどの亀裂になる。

「ひっ」「えっ、何だ」「うわっ、あぶね」「おおー」「ぁあ、何だよ、これ」「うぷすっ、まじかょ？」

冷たい眼でイユノは不良たちを睥睨する。

「あんたら、こんなふうになりたいの？
悪いけどさー、なりたくないんなら、わたしにもう絡まないでくれる？」
「は、はぁ？　おまえがやっただと？　おい、ふざけんな、ナメたこと言ってんじゃねーぞ、おい、こら」
イユノは嘆息した。
「信じないか。
めんどくさいなー。じゃ、これでどうかなー？」
ヤンキーらの周囲のアスファルトやコンクリートや土が爆ぜ裂けてその破片が彼らを襲う。
「ぅわっ、何だ、やばい、ぅわっ、痛っ、あ、イタイ、ィタっ、危ねー、ぅわーっ」
「どう？
信じられなくても信じておくしかないでしょ。現にヤバいんだからさ。それが現実よ。
死にたくなきゃ〝僕は頭悪いクズ野郎です。御免なさい〟って言って土下座しな。
じゃないともっとヤバくなると思うよ」
「てめー、ふざけたこと言ってんじゃねーぞ」
「あー、はい、はい。じゃ、望みどおりにね」
5秒後には斃れて立ち上がれない二人以外は失禁しながら震えて土下座している。
「ふーん、しかたないわねー。
そんなに泣いて謝るんなら赦して上げるわ。
今後は気をつけることね。人間って弱いんだからさー、自分を知ってそれなりにしていなさいよ。
あはは」
校内に入る。ここでも男子の眼差しが違う。
廊下の鏡に自分を映して見る。
やっぱり何も変わっていないように見える・・・でも、きっと何か

がぜんぜん違うんだわ。神の光輝があるんだもん、当然よね。強いて言えば眼・・・かな？　阿修羅の双眸の強さ、魔性、美しさ、燦めき、睿さ・・・・あると言えばある・・・気がするけど。

廊下を歩くとあちこちで話題になっているのは例の殺人事件だ。職員室でも緊急の職員会議をしているらしい。

教室が近づくと、同級生たちがイユノに気がつき、

「あー、イユノじゃん！　久しぶり、大丈夫？」

などと声をかけるも、手のおぼろな青龍を見て、

「どうしたの、それ」

「何が？　ああ、これ？　何でもないわ」

教室に入ると、沙耶香が近づいて来た

「ねー、おはよー、イユノ、久しぶりぃ。元気だった？　超心配してたんだからー」

・・・・だったらメールぐらいしろよ。

ま、いいか。

優しく接すれば人が優しく接してくれるとは限らない。下手に出れば人はつけあがる。強く出れば尊重される。恐れさせれば自分の尊厳が維持される。ただそれだけでは角が立つので、要所要所に優しい振舞いを采配する。優しさはそういう使い方をされている。

くだらない、力だけの世界だ。莫迦莫迦しい。愚かしさ・・・

しょせん、ゲームさ。イユノは豪奢な微笑を浮かべた。彼女の頬の上に生まれて初めて象られた造形だ。恐らく表情筋が吃驚しているに違いない。

「ごめんね。ちょっと体調悪くてさ。もう大丈夫だよ」

そう言いながら相手の眼を見ると「フラれて病んで休んでいたくせに」と思っている色が自然に読み取れた。・・・だよな。まあ、正しいけどさ。別に気にしないよ。

「イユノ、何か感じ変わったね。カラコン変えた？　何かさ、眸が違う気がするー」

沙耶香はそう言いながら、しみじみイユノを見る。周りもイユノ

を見ていた。
　特に男子が。
「平衛の奴さ、何か変わったなー」「やばくない？」「魔女？」「きれいになったんじゃん？」「眼つき怖っ」「エロくないか？」「肉食系？」「マスカラ？　アイ・メイク？　整形？」「って言うか、刺青じゃん、あれ」
　イユノは流し眼でクラス全体を見渡す。じっと見つめ返すと、もう誰も何も言わない。
「ふふん」
　担任が入ってきた。
「おお、平衛か！　来たのか！　先生は心配してたぞ。いったい、どうしていたんだ。ご両親に何度も」
「元気です。坐っていいですか」
「おい、おまえ」
「は？」
「何だ、その態度・・、おい、いや、あ、平衛、おまえ、何だ、それは」
「何ですか？」
「何ですかじゃない、それは何だと訊いているんだ」
「何が」
「とぼけるな、それだ」
「どれ？」
「それだ、わかってるんだろ！　それだ！　それタトゥーじゃないのか！」
「いけませんか？」
「まさか、ほんとにタトゥーなのか！　おまえが！」
「悪い？
　って言うか、刺青じゃないンだけどなー」
　イユノは高らかに笑った。
「おい、ふざけるな」

「いけない？」

にらみ返した。指一本触れてないのに、先生が突き飛ばされたように倒れる。教室が一瞬、静まった。すぐに控え目なざわめきが起こる。先生自身も何が起こったのかわからないで吃驚していた。何か言おうとしたが、言葉にならず、腰が立たないらしい。

始業のチャイムが鳴った。

「どうしたんですか、先生。めまいですか？　さあ、早く授業を始めてください」

そう言って再び高らかに笑った。そのとき、イユノは見られていることに気がつく。誰？　シノブだった。廊下からこっちを見ている。その表情には不思議な感情があらわれていた。

険悪な面相、いや、憎しみ表情にも見える。

イユノは廊下に出た。

黙ってにらんでいたシノブ唇が動いて、

「眼覚めてしまったようね」

そうつぶやいた。

「どういうこと？」

やっぱり、こいつ、何かあるンだ・・・イユノはそう思う。

「ここじゃ話せない。昼休みに体育館の裏に来て。大楠のところね。さあ、授業が始まるわよ」

「わかった。昼休みね。それでいいよ」

余裕で弁当を食べた後、体育館にいく途中、イユノはまたも不良グループに呼び止められた。今度は上級生だ。

「あんた、待ちなよ。んだよ、その腕。だっせー。高校生デビュー？みっともねー。いきがってんじゃないよ」

こいつら、本能的に脅威を感じてるだけだ・・・猫みたいに毛を逆立ててる。

「ふーん。関係ないじゃん」

「誰に口きいてんだよ、テメー」

「おまえにだよ、低能」

「な、何だとぉーっ」

イユノはもはや言葉で応えず、睛（ひとみ）を大きくし、眼を睜（みひら）く。

小さな稲妻が起こって不良グループとイユノとの間に墜ちた。大きな音を立てて地面が1メートルぐらい裂けてへこむ。

「うぎゃっ」「ひゃーっ」「ぅわぁぁあ」

「文句があんなら軍隊でも呼びな」

フリーズしてしまった連中を置いて、イユノは楠の大木の下に向かう。

シノブがいた。風もないのに彼女の髪がゆれている。黒い炎のように。

「たぶん、もうわかってると思うけど…

わたしたちはね、進化した人間なんだよ」

「何だ、それ」

「自分でわかってないようね。説明が必要のようだわ」

「めんどくさいことやめてくんないかな」

「すぐ終わるわ。黙って聞きなよ」

「つーかさぁ、今日まで何も言わなかったくせに、何で今頃よ？

あんたを信じらんないね。

知ってたんなら、さっさと教えてりゃーよかったじゃん。眼覚めちゃったからしかたなく教えるってわけ？」

「別に知りたくなきゃいいのよ。

あんたの好きにすればいいわ」

イユノは考えた。

進化か…どういうことだろう？　どっちかって言うと、元に戻ったとか、還った、昔に還った、っていう感覚なんだけど……わかんない。知りたい…

しかしイユノは少し我慢して様子を見ることにした。

「じゃ、好きにするわ。

バイバイ」

シノブも止めなかった。イユノは背を向けて立ち去る。

しかし教室にもどってからも気になっていた。

考えた。『眼覚めた』ってのは、何となく意味はわかる。でも、進化した人間ってどういうことだろう？　わからない。

わたしの知らない何かを知っているのか。第一、あいつ、本当は何者なのか？

「でもいいわ。

よくわからないけど、とにかくあいつは焦りを感じている。待つ方が得策よ。踊らせた方がいい。

あいつは前から何かを知っていたんだ。もしかしたら娑斗獅への恋愛感情も偽りで、何か計画的な行動だったのかも。

3　闇

放課後になった。

シノブの動きはない。イユノは普通に下校した。バスに乗る。

駅に着いた頃、スマートフォンが鳴った。娑斗獅からだった。もし連絡が来てもぜったい応じないつもりだったが、いまは気にならない。出た。

「何？」

「いまどこにいる」

「学校の帰りだよ。何の用？」

娑斗獅がゆっくり言う、

「会いたくなった・・・のかな」

うざいなー。そのカリスマ気取りの口調。昔はそれが好きだったんだけど。

「誰が誰に？」

「俺がおまえにさ」

「わたし、興味ないンだけど」

「昨日の夜、夢見たんだ」

「わたしを？」

スゲー陳腐。
「そうだ」
そりゃーあ、そうかもね。何たって、ベランダから寝顔見てたんだから……修羅になって。
そのとき誰かがイユノの肩を軽く叩く。
「カレシと電話かな。そんな奴よりオレと遊ばないか」
振り向くと、県立眞神高（安房市内にある。最寄り駅は赤門戸駅。私立眞神とは違う）の制服を着た男の子が立っていた。アイ・メイクしていて眉を描き小麦色の肌に髪はウルフ。チャラい男。
「何だ。糞か」
……こいつらに比べたらわたしはよっぽど進化してるわ。ま、シノブが言おうとしてたのは、そーゆー意味じゃないと思うけど。
スマホの向こうで娑斗獅が訝り、
「どうした、イユノ？」
「あー、わたしね、いまどうやらナンパされてるらしいから、あとでねー」
「おい、イユノ」
切った。
あー、あほらし。あんな男、殺そうとしてたなんてねー。
チャラ男を忘れて、そのまま行こうとすると、
「あ、ちょっと待って。ねー、シカト？　冗談でしょ？
それよりさ、カレシ、どうしちゃったの？　ケンカ？
最低なヤローだね、キミみたいなかわいい子をさ。
さーさー、気にしないで、慰めてやるよ。オレって、やさしいだろ？
じゃ、行こうか。何したい？　へっ、まじ、かわいーね。タトゥーもいいねー」
「うるさいよ」
「は？」
「気持ちワルいから近寄らないでくれる？」

「んだよー、テメー、ちっとキレイだからって調子こいてんじゃねーぞぉ」
「はあ？」
「あ、何だよ、逆ギレかよ」
その途端、男の制服が裂けて左右に落ちた。
「ぅわっ、ぅわ、何だ、コレ。あ、あれっ、ひえぇぇーっ」
「あはははっ、莫迦みたい、みっともねー」
イユノはスタスタとその場を去って改札を抜ける。電車に乗る。
バスで天海線の赤門戸駅に出て、そこから薙久簔駅まで行き、眞神線に乗り換えて龍呑駅で降車するのが通常の経路である。
しかしイユノは薙久簔町の中の神中州駅で降りた。繁華街のあたりを歩き、事件の現場を探す。
「うーん、来ればわかると思ったんだけどなー。意外にわかんないなー」
アーケード商店街を歩きながら、気配を探った。何らかの痕跡が残っていないかを。
雑踏の中、歩きながら半ば瞑目して心を澄まし、念を凝らす。アスラの叡智で何かつかめないか・・・うーん、やっぱ裏路地かも・・・きっと。
曲がった。
狭くて少し暗い、昔ながらの雑然とした狭い小物店やくすんだお菓子屋、空っぽの木の箱が積み重ねられた豆腐屋、コロッケの臭いがきつい肉屋、ガラスケースに数匹の魚、奥に濡れた俎と包丁、水が下を流れている魚屋、裸電球の八百屋、小さな呑み屋や雑居ビルの非常階段・・・・・。
メインの通りからあんまり離れたら民家ばかりになる。そろそろどこか曲がろうとしたときだ。
怪しげな宿から一人のギャルが出て来た。
「あっ！」
以前のイユノだったら声を殺していただろう。けど、いまは怖い

ものなしの修羅である。
出て来たのは同じ高校に通うアザミだった。彼女もイユノに気がつく。
さっと顔をそむけて向こうへ行こうとする。イユノは何だか面白くなって瞬間移動する。彼女が曲がろうとした角で立って待っていた。
「ぅわっ！」
気の強いアザミもさすがに驚く。
イユノは平然と言う。
「アザミ、何でシカトすんの？」
「てめー、さっきあっちにいたのに、いつのまに。てか、何なんだよ、カラムんじゃねーよ」
「あんたこそ、あんなとこから出て来てさ。何してたのよ」
「何なの、イユノ？　おまえ、フラれて頭おかしくなったんじゃねーの？」
「まともだよ。もう完治したし。つーか、どうでもいいわって感じね。恋愛ごとき（笑）」
「ふっ。好きにしな。いいから絡むんじゃねー。関係ないだろ。とっと消えなよ」
イユノの脇を過ぎて行っちゃった。アザミのバッグの中で着うたが鳴り、めちゃめちゃデコレーションされたスマートフォンをバックから出す。
「ああ、歩夢（アユム）？　まだ仕事中だよ。終わったら電話する。わかってんよ、今日、寄っていくから」
ウリやってんのかなー。それともデリヘル？
アザミが電話に夢中でこっちを見ていないのをいいことに、雑居ビルの屋上に飛び上がり、様子をうかがう。電話が終わったアザミは急にイユノの姿が見えなくなってきょろきょろしていたが、脅かされて逃げるように帰ったんだろうとでも思ったか、歩き出した。
イユノは上からアザミの動きを追う。追い駈けて屋根から屋上へ

と跳び移る。
ある事務所に入っていった。
「あー、火龍（かりゅう）組じゃん。
じゃ、デリかぁ…確かにデリやってるって噂の奴、学校の中に何人かいるけど、そういう奴らって、ブランドものとかたくさん持ってるんだよね。
アザミってそういう印象なかったなぁ。
まあ、確かに不良だけどさー」
すっかり暗くなっていた。
「ちょっと遊ぶか」
イユノは組事務所の前までひらりと飛んで降り立った。開けっ放しの入り口から入る。
太って体のでかい坊主頭がソファに足組んで坐っていた。イユノに気が附いてにらむ。
「何だぁ？」
「アザミがここに来たと思うんだけど？」
「あぁん？　何だ、ねーちゃん、友だち探してんのか？　なら、勘ちがいだな。そんな女はいねーよ」
「アザミー、いるのはわかってんだよ。出ておいで。あんた、こんなとこで何してんの？」
ドアが開いてアザミが怪訝そうな顔でのぞく。
「イユノ、何でここにいんだよ！　テメー、ついて来てんじゃねーよ」
「あんたさ、こんなことやめときな。何でやってんのさ」
「こんなことって何だよ？　オメーにかんけーねーだろ」
「そうなの？　別にいいじゃん」
「はあ？　何だ、オメー。怪我したくなきゃ、さっさと帰んな」
アザミがそう言うと、坊主頭が笑いながらガラガラ声で、
「おい、おい、人聞きのわり―こと言うなよ。俺がこんなおじょーちゃんに手を上げるわきゃねーだろ」

「どーぞ、遠慮しなくていいよ。やくざのおじさん」
「あーん？　何だぁ、このアマ、調子こいてんじゃねーぞ」
「本当にバカって、短気だねー。アザミ、こんな連中にかかわんのやめな」
「オメーさー、ほんと痛い目見るよ。かんけーねーんだから出て行けっての」
坊主頭が立ち上がった。
「そういうこったぁ。さぁ、行っちまいな」
「触るんじゃないよ、クズ」
イユノの肩に手をかけようとするやくざに言った。男が顔色を変える。
「ンだと、このアマ！」
「人に迷惑かけてんだろ？
クズと呼んで何が悪いの？　金のために罪のない人を騙したり、暴力で脅したりして屁とも思わないんだろ？　クズじゃん。何がどう違うのよ」
「おお、威勢がいいじゃねーかよ、おじょーちゃん。
しかし調子こいてんと泣き見るぜ」
「は？
何か文句ある？　調子こいてんのは、あんただろ、おっさん。クズをクズって言って何がわるい、クズ」
「こ、こんにゃろぉーが」
「ぅっせぇーんだよ、女の子にこんな仕事させてさー、クズ以外に何て言ったらいいのよ？　ねえ、教えてよ、禿げデブおクズさん」
「おい。
俺が法を怖がって手出ししねーと高を括ってるよぉーだが、そうは行かねえぞ、おじょーちゃんよ」
その瞬間、眼に見えない巨大な斧が振り下ろされたように床に亀裂が入り、風圧で坊主頭の巨体が吹っ飛ぶ。大きなデスクにぶつかっても止まらず、デスクごと壁に叩きつけられ、気を喪った。

「あれ？　もう終わり？
おじさん、弱過ぎだよ。さっきの威勢はどこ逝っちゃったの？
さんざん喚いてたのにさ。あはは。みっともねー。
弱い奴ほどよく吠えるんだよねー。
ぁああ、何で男ってのは口先だけのクズばっかりなのかねー。
さ、アザミ、帰ろ」
「あんたさ……いったい、何したのよ？」
声が震えていた。
「帰るんだよ」
「やだ」
「何で？」
「仕事があんだよ」
「仕事って……マジでこんな仕事したいの？　何でこんな仕事してんだよ」
「きゃはは、説教オヤジみてーなこと言ってんじゃねーよ。だいたい、こんな仕事って何だかわかってんのかよ」
「デリだろ」
「そうだよ、わりーかよ」
「何で……？　信じらんない、知らない気持ちわるいおじさん相手に……」
イユノはキスもまだだった。
「きゃはは。若い奴だって来るさ。そんなことよりさ、金だよ、金が必要なんだよ。
メタボだろうが加齢臭だろうがかんけーねー」
「マンガか、ドラマみたいなこと言うねー。
何でそんなにお金が欲しいわけ？」
「だからさぁ、あんたにかんけねーっつーの」
イユノはさっきの電話の歩夢って名前が気になっていたので、
「ところで電話してた歩夢ってのさ、一学期で学校辞めた草叢（くさむら）歩夢のこと？」

アザミの顔が引きつった。
「オメーにかんけーねーってんだろが。知らねーよ、そんな奴」
「あー、めんどくせー女だなー」
「どっちがだよ」
そのときだ。
イユノは何か異様な気配を感じた。
「何だ、これ」
アザミがムッとしながらも不思議そうな表情で、
「は？
あんた、何なの、急に。アサッテの方向をにらんじゃって」
そんな問いかけをシカトして、イユノは外に出た。
茸柳（たける）だ・・・事務所の前にいたのは茸柳だった。
いや、茸柳のイリュージョンだ。夜の海で燐のようにぼぉっと光るクラゲみたい半透明で、半ば空中に立っている。
「茸柳・・・何で、あんたが。
てゆーか、まさか、あんたもわたしみたいに・・・」
まさか、って言いながら自分の蔑みの情を反省した。こんな奴がまさかって、おかしいでしょ。そう言う自分だっていままで何だったのよ。
もしかして世の中って逆なのか、とイユノは思った。負け組は力を封じられているだけで、神族である確率が高いんだ・・・
ってことは、こいつ、いままでがいままでだけにかなり物凄い奴かも・・・
「茸柳、あんた聞いてんの？　あんたは何者なのよ」
そう言ってからあまりに表情がなく、人間的感情が希薄なのに気がついた。ただ物凄い一念が、一つの感情だけが圧倒的なかたまりになって存在している。一つの情にすべてを奪われて表情が埴輪のようになっている。ある意味、死んだ人の怨念みたいだ。死んでいるんじゃないよね・・・？
彼は無表情に正面を向いていた。

正面に立つのはむろんイユノだ。
しかし、その眼差しはイユノの存在を透過していた。イユノが振り向く。事務所の中には気を喪って倒れている坊主頭とアザミしかいない。
「アザミを見てるんだね」
アザミが何事かと疑って出て来た。
「どーしたんだよ、イユノ」
そのとたん、茸柳のイリュージョンは消えた。
「え、どういうこと？
……もしかして、これって」
「何よ、あんた、さっきからおかしいよ」
「アザミ、今日は早く帰んなよ、わたし、急に用事ができたから。じゃーね」
さっと走って角を曲がる。
「おい、何だよ、テメー」
釣られて追うように走ったアザミが角を曲がると、もういなかった。
ぽかぁんとしてつぶやく。
「いきなりあらわれて好き勝手していきなり消えちまったよ」
イユノは駈けだしてから、角を曲がったところで飛んだのだ。コウモリのように宙を舞い、イリュージョンの痕跡を追った。茸柳の残した痕跡はかすかで、彼の住所をちょっぴり知っているのでなければ追跡不可能だったろう。
眞神郡の奥、イユノの住む龍呑よりもさらに奥、畝邨村にある白舟家の屋敷の一つである広壮な母屋の甍が見えてきた。
「きっとあれだ」
屋根に下りた。音も立てずに瓦の上を歩き、２階の窓をそぉっとのぞいた。
茸柳が眠っている。まだ午後９時前だったが。
「あれー。

眠ってるよ。あれ、茸柳じゃなかったのかな。いや、それはないと思う。んー。でもどうかな。考えてみれば雰囲気は別人だった。でもなー。

本人だよな、直感的、かつ直観的に言って。だとしたら眠るの速過ぎないかな。

実はわたしに追われていることに気がついていて狸寝入り？いや、そう見えない。眠っているようにしか見える。皮膚の疲れぐあい、力の抜けぐあいとか自然だよなぁ」

屋根にしゃがみ、肘をついて考える。

「それとも、ずーっと前から寝ていたのかな。

帰宅して食後すぐに寝るタイプだとしたら数時間前から寝ていたとか。そういう人って、夜中になって起き出してパソコンとか始めるんだよねー。ま、そりゃあ、どうでもいいや。ともかく」

茸柳の部屋をじっと観察する。

「魔法とか神学とかの本はなさそうね。

術ではない、可能性が高いってことかな。って言うことは、さっきのイリュージョンは……何なの？

意識的じゃないってこと？　でも何なの？　もしかして寝ているあいだに霊魂が抜け出して……？　でも、実際そんなことってあるのかなー。生霊？　幽体離脱してってこと？

ともかくもずっと眠っていたとすれば彼自身、自分が何をしたか知らないかも。

だとすると……

本人は何の自覚もないのかもしれない。

ああ、何か思い出してきたけど、本人じゃない本人が幽体離脱して出て来たってことなんじゃないかなー。

もしかして深層心理の奥の奥に封ぜられていて普段は表に出ないもう一つの人格が寝ている間に出て来てたとか……ありそうな気もする。けど……

んー、難しくてよくわからん。

そう言えば人間って、（いや、人間に限らず）たくさんの人格があって、それを束ねるメインの人格があるから、見た感じには統合的なキャラクターがあるかのように見えているって、聞いたことがあるけど……

考えてみれば動物だって敵を前に怒っているときと穏やかなときとでまったく別物になっちゃってるものね。

確かに犬とか猫でも、戦闘モードのときは完全に切り替わって豹変（本当の意味は違うけど。『君子は豹変する』ってのは豹の毛が抜け替わって美しい模様になるように立派な人は経験を積んで高貴に成長するという意味らしい）しちゃうことってあるよね。

まあ、野生の動物はそうじゃなきゃ生きていけないんだろうけどさ。

人間みたいに統合的人格だと生き残れないだろうからね。戦うときは完全な戦闘マシンになり切らないとね。死力を尽くして。

まあ、いいや。ともかく可能性はあるな。

茸柳の場合も普段抑圧されている不平不満の人格が鬱憤を溜め過ぎて、メインの人格が寝ているすきに外へ出てきているのかもしれない。

けどさ、こんなことができるってことは彼もただ者じゃないってことよね。

ふふ。面白いわ」

などと考えていると茸柳が起き出した。

彼はベッドから出るとパソコンのスイッチを入れる。立ち上がった画面にはアザミの画像が・・・！

「アザミが壁紙かよ。

こいつ、ちょー地味なくせにあんな派手な奴好きなんだー。人間ってそんなもんか？　自分に似合わない異性を求める。

まあ、生命に雌雄の別があって、雌雄が交配するのって、いろんな組み合わせの遺伝子を作ってウイルスに対抗するためだって聞いたことがあるけれども、その原理から考えればかけ離れたものと交

わろうとするのは原理的に正しいのかもね(笑)。

ってのはともかく、現実問題としてはどう考えても実らない恋だな。はは、かわいそー。歩夢って存在もあるし。

しかし、こうやって見ていても、うーん、これ以上何の情報も見えないなぁ。ゲーム始めちゃったし。

どうしようかなー。今日は引き返すか。帰ろう。何かわかんないことだらけで消耗したー」

しかし夜空の飛行は爽やかで気が晴れた。

洋館の屋根に夜の烏のように着地すると、窓から部屋に入り、着替えもせず、脱ぐだけですぐにベッドに入る。

「あー、眠い・・・」

瞬く間に眠りに落ちた。